

町医者だより

平成28年06月号

更年期は新規喘息発症のリスク

40歳から60歳までの女性で喘息が悪化することを平成26年4月号の町医者だよりに「更年期喘息」というタイトルで書いています。この「更年期喘息」と言う言葉が一般的かどうか分かりません。今回、ヨーロッパで行われた更年期と喘息に関する論文を紹介いたします。

更年期の定義

今回紹介する論文はJ Allergy Clin Immunol 誌の今年の1月号に掲載された論文でヨーロッパの複数国で採られたデータの解析です。この種の論文は更年期の定義が大事です、本論文では「更年期」を、月経が少なくとも6ヶ月以上ない、最終月経から月経がない状態が182日以上、過去12ヶ月に月経が3回未満、両側の卵巣除去術後のいずれかに該当する場合と定義しています。「更年期移行期」は2-3ヶ月不規則な月経が続く、最終月経から月経が止まっている状態が182日未満、過去12ヶ月で月経が3回から9回、片側の卵巣を取っている、子宮切除を受けている、のいずれの状況にある場合です。さらに「更年期」を「早期更年期」と「後期更年期」に分けていますが、「早期」は経過観察の開始時には月経が過去12ヶ月で10回から14回ある「非更年期」であったものが、12年以上の観察期間中に更年期になった場合を指し、「後期」は観察期間の開始時にすでに更年期にあった場合です。

解析結果

45歳から60歳の2322名を対象に解析を行っています。更年期（閉経）の平均年齢は50.2歳でした。新規の喘息の発症の相対的なリスクは、「非更年期」を基準とすると、「更年期移行期」で2.4倍、「早期更年期」で2.11倍、「後期更年期」3.4倍でした。更年期前後から喘息と診断される頻度が2倍以上になると言うことです。さらに咳や息切れなどの呼吸器症状の出現頻度ですが、「更年期」以降増加し、「早期」更年期よりも「後期」更年期のほうがさらに上がっています。更年期を境に喘息の発症が起こりやすいのはどうしてでしょうか。本論文では女性ホルモンがもともと全身の炎症を抑える働きがあると考えられ、更年期に女性ホルモンの減少で全身の炎症が悪化し（そう言われてみれば、関節痛や血管の動脈硬化の進行が見られます）、気道の炎症を悪化させ喘息を発症するのではないかと推測しています。

見逃されやすい成人の喘息症状

別の研究ですが（米国National Jewish Healthが本年5月に発表）、成人の喘息症状としてどのような症状が多いか患者さんに電話調査をしています。それによると「息切れ」が89%で最も多く、「喘鳴（ゼイゼイ）」が85%、「長引く咳」が65%、「胸痛」が54%、「睡眠障害」が51%でした。喘鳴は、喘息の特徴的症状ですが、これはいつも患者さんに説明していることですが、この調査結果と異なり医者が喘鳴を聴診で確認できる頻度は非常に少ないです。このことは過去の町医者だよりでも触れていますが（平成24年3月号、平成25年12月号、平成26年11月号）当院での喘鳴の頻度も6%未満です。この調査で「喘鳴」が高頻度だった理由として一つには痰が絡んでいる時にも気管が鳴ります。これはロンカイといって喘鳴と区別しているのですが、一般の方はロンカイも「喘鳴」と認識している可能性があります。また人種による喘息の重症度が異なります。一般的には黒人の方が重症で、今回の電話調査の人種構成が影響します。また喘鳴が起きる時間が圧倒的に夜間（明け方）に多いです。このことも医者による確認頻度とのギャップを生じます。「胸痛」症状ですが咳や息切れが全くなく胸痛だけを訴える患者さんは確かにいます。最後の「睡眠障害」ですが、大学病院に勤務していた頃バイト先の企業の外来に眠りが浅くだるくて仕方がないと言う30歳くらいの社員さんが来院されました。咳や息切れ（息苦しさ）などの呼吸器症状は小児期含めて全くなかったのですが、確か喘息の家族歴があるため呼吸機能検査を念のため行ったら喘息があって吸入薬を開始し、訴えていた症状が軽減したことがありました。

<発行・お問合せ先>

おおわだ内科呼吸器科

院長 大和田 明彦

市川市南八幡4-7-13

シャポール本八幡2階

JR本八幡駅南口(シャポール改札口)

2分ミスタードーナツ並び

ヘアサロンAsh向かいビル2階

電話 047-379-6661

おおわだ
内科
呼吸器科